

「テーマ (1)」

1. はじめに

- (1) あいさつ (1~7 節)
- (2) ローマ教会との関係 (8~15 節)
 - ① 「心の絆」を結んだ。
 - ② パウロの使命意識が明らかになった。
- (3) いよいよテーマに入っていく。
 - ① 今回は 1 : 16 のみ取り上げる。

2. 「私は福音を恥とは思いません」(16 節)

- (1) 日本語訳では、「なぜなら」という言葉が抜けている。
 - ① 15 節と 16 節をつなぐ重要な言葉である。
 - ② 英語では、「For」であろう。
- (2) パウロがローマにまで行って、命がけで福音を伝えたい理由がある。
 - ① それは、彼が福音を恥としていないからである。
 - ② 「しない(思わない)」という言葉に強調がある。

(3) 「恥と思う」とは、信じないことと同じ意味である。

① マコ 8 : 38

「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます」

② 2 テモ 1 : 11~12

「私は、この福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命されたのです。そのために、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです」

(4) 「恥としない」とは、完璧な信頼を置いている、誇りとしているという意味。

(5) パウロがそう言わざるを得なかった理由がある。

① 1 コリ 1 : 22~23

「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです」

②ユダヤ人からは軽蔑される。

*彼らはキリストからでさえも「しるし」を要求した。

*十字架の死は、呪いの死である。「つまずき」である。

*パウロはユダヤ人から迫害された。

③ギリシヤ人からも軽蔑される。

*彼らは知恵を追求した(ローマ人は力も追求した)。

*十字架の死は、愚かである。

*パウロは無視された。

2. メッセージのアウトライン(ギリシヤ語の語順に従って)

パウロが福音を恥としなかった4つの理由

- (1) 神の力
- (2) 救い
- (3) すべての人
- (4) 先ずユダヤ人、そしてギリシヤ人

3. メッセージのゴール

- (1) 救いの本質の理解
- (2) ユダヤ人、異邦人という順番

このメッセージは、パウロが福音を恥としなかった4つの理由を考え、福音の本質を理解しようとするものである。

I. 神の力

1. 「福音は、神の力です」

- (1) 福音の定義はこの箇所にはない。

2. 1コリ15:3~8にある定義

「私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、

葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと…」

- (1) キリストは私たちの罪のために死なれた。
- (2) 葬られた。
- (3) 三日目によみがえられた。

3. パウロのイメージの中には、イザ55:11があったに違いない。

「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる」

- (1) 神のことばには力がある。
- (2) 究極的な神のことばは、イエス・キリストである。
- (3) イエス・キリストは、父なる神の計画を成し遂げ、成功させた。

4. パウロは、福音の中に神の力が内在していることを確信していた。

- (1) 福音は、御子に関することである。
- (2) 福音は、御子を通して成し遂げられたことである。
- (3) この福音に全幅の信頼を置いていた。

II. 救い

1. 「福音は、救いを得させる神の力です」

- (1) 「救いをもたらす神の力だからです」(新共同訳)
「救いに至る神の力だからです」(直訳)
- (2) 逆に言えば、神の力は救いをもたらすということ。

2. 救いがこの書簡のキーワードである。

- (1) ロマ書1章~8章までは、救いの説明と定義である。
- (2) チャート参照。

3. 救いの3要素

- (1) 義認(過去形の救い)
 - ①信じた瞬間に与えられている。
 - ②善良な人間になったということではない。
 - ③これは法廷用語である。
 - ④父なる神との関係が変化した。和解させられた。

(2) 聖化(現在進行形の救い)

- ①完成に向かうプロセスである。
- ②クリスチャンはみな、この過程を歩んでいる。

(3) 栄化(未来形の救い)

- ①救いが完成した状態である。
- ②私たちはやがて栄光の姿に変えられる。

4. 福音が神の力である理由は、救いの3要素がすべて約束され、成就するからである。

(例話) 安いツアーはグッド・ニュースか。安いなりのわけがある。

- (1) 義認だけなら、神の力は3分の1である。
- (2) 聖化までなら、神の力は3分の2である。
- (3) 栄化まで成就するがゆえに、それは100パーセント神の力である。

III. すべての人

1. 「福音は、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」

- (1) 救いは、すべての人に差し出されている。
- (2) しかし、すべての人が救いを経験するわけではない。
 - ①救いを受ける条件(方法)は、信仰である。
 - ②福音の3要素を信じ、イエスをそのようなお方として信頼すること。
 - ③イエスの処女降誕や復活を信じない牧師やクリスチャンがいるが、その人たちは救われていない。

IV. 先ずユダヤ人、そしてギリシア人

1. 「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」

- (1) 「先ずユダヤ人に対して、そしてギリシア人に対して」(直訳)
- (2) 福音伝達には神が計画された順序がある。

2. 動詞はひとつで、現在形である。

- (1) 今も福音は、神の力である。
- (2) 今も、ユダヤ人、ギリシア人という順序が有効である。

結論：メッセージのゴールは、パウロが福音を恥としなかった理由を考え、福音の本質を理解することである。

1. 救いの本質の理解

- (1) 信仰以外の条件を付け加えるなら、福音は神の力ではなくなる。
- (2) 教会史は、そういう事例で満ちている。
- (3) 義認、聖化、栄化はすべて信仰によるということを教えないなら、神の力を割引していることになる。

2. ユダヤ人、異邦人という順番

- (1) 時間的順番(ユダヤ人の選び)
- (2) 契約が与えられた順番
- (3) キリストの宣教の順番
- (4) パウロの宣教の順番
 - ①使13:4~5 サラミスでの伝道
 - ②使28:23 ローマでの伝道